

## 「アシスタントティーチャーを終えて」

こども発達学科 4年 木全加菜

私は昨年度に引き続き、恵庭市立恵み野小学校で約四か月間アシスタントティーチャーを経験した。配属学級は3年1組で、男女計40人の学級である。短い期間ではあったが、2回目のアシスタントティーチャーであったため先生として冷静に子どもたちと関わることができました。昨年度と比較してどのような違いがあったのかを中心に、アシスタントティーチャーを通して学んだことを3つ述べていく。

一つ目は、子どもと関わることに精一杯だった昨年度と比較して、担任の先生の言動に目を向けることができたことである。児童が小声で言ったことを拾い上げて全体に共有したり、児童が自分の力でできるようにあえて言葉がけをしなかったりしていた。特に印象的だったことは、児童が揉めごとをしている時にその険悪な雰囲気を一瞬にして吹き飛ばすような言葉がけをしていたことである。通常であれば叱ってしまう所を、叱らずにクラスの皆を笑顔にしていたため、ただ叱るだけでは駄目だということを改めて感じた。このことから、その場の雰囲気や状況を考慮して対応できるよう経験を積んでいく必要があることを学んだ。

二つ目は、担任の先生と朝や放課後に話し合う時間があったため、昨年度よりも密な連携ができた。朝は授業の内容や進め方についてだけでなく、支援を必要としている児童について、クラスの児童とどのように関わってほしいか等、担任の先生の願いを共有することができた。そのため、私自身も意識して関わるすることができたように感じる。また、放課後には今日一日で気になったことや担任の先生が見ていない所での児童の様子等を報告し、交流するように心がけた。交流する時間が多かった分、先生の願いや支援を必要とする子に対して今先生が心がけていること・考えていることを聞くことができ、貴重な経験ができたと考える。

三つ目は、任されることが昨年度よりも増えたことである。何度か先生の急用が入った時、朝の会の進行を任されることがあった。最初は、流れがわからなかったため児童に教えてもらいながら進めた。その後は、いつ任されても良いように日頃から先生の行動を見るように心がけた。このような経験から、臨機応変に動けるようになり、また冷静に対応できるようになったと感じる。

アシスタントティーチャーとしての指導及び援助の経験を通して、教師という仕事に対する期待だけでなく大変さを改めて実感することができた。また、教師による児童への言動が今後の関係作りに大きく影響することを学んだ。四月からは実際に働くため、教師としての責任や自覚をもって働いていけるよう日々精進していきたい。